連絡先：那須ＹＭＣＡ　〒320-0041　宇都宮市松原 2-7-42　（とちぎＹＭＣＡ内）　TEL　028-624-2546　FAX　028-624-2489

THE Y'S MEN'S CLUB OF NASU

NETWORK NASU

CHARTERED 1995

那須ワイズメンズク

2024～2025年度　№310

１０月報

那須クラブ会長　主題

ユースと共に那須YMCAの活動を探る

強調月間：ＡＳＦ

今月の聖句　ゼカリヤ書４：６

彼は答えて、私に言った。「これがゼルバベルに向けられた主の言葉である。武器によらず、権力によらず、ただわが霊によって、と万軍の主は言われる。

１０月第１例会（アジア学院の収穫感謝祭に参加）

日時：１０月１８日（土）午前９時集合・準備
　　１０月１９日（日）午前９時集合・準備
場所：アジア学院　広場
　　那須塩原市槻沢４４２－１

アジア学院への奉仕は、那須ワイズの設立以来ずーっと続けている。その中で１年に一度の収穫感謝の日の集い（チャリティーバザー）への参加も行っている。多くの方々よりご寄付をいただいたものを販売し、その収益金をアジア学院へ献金をしている。今年は、２日間開催となりました。皆様のご協力をよろしくお願いします。昨年は、５０，０００円の寄付を行いました。
１９日（日）は、ユースリーダーの参加もあり、ユースリーダーによる射的コーナーがあります。

１０月１７日（金）午前９時３０分より、田村会長宅で、寄贈品等の確認を行います。

２０２５～２０２６年度　主題

国際会長：（ＩＰ）　エドワード・オン　（シンガポール）
　『信念、愛、行動』
アジア太平洋地域会長：（ＡＰ）　田上　正（熊本むさしクラブ）
　『信念と愛を持って行動しよう！』
東日本区理事（ＲＤ）：　山下　真（十勝クラブ）
　『ワイズのらしさ再発見』
北東部長：　三田　庸平（もりおかクラブ）
　「ユースと共に明るい未来を」

クラブ役員

会　長　：村　田　　榮
副会長　：田　村　修　也
書　記　：藤　生　　強
会　計　：鈴　木　保　江・村　田　　榮
担当主事：武　田　将　吾
ブリテン：田　村　修　也・村　田　　榮

９月例会データー（出席率：１００％）

メンバー６名、メネット２名、ビジター５名
ゲスト４名、（広義会員１名）
メイキャップ

１０月　Happy　Birthday

なし

北東部大会（北東部フォーラム）

日時：１０月４日（土）午前１１時～午後５時
場所：コラッセふくしま４０１会議室

１１月例会（ユースリーダーとの交流会）

日時：１１月２０日（木）午後７時～
場所：日本基督教団　西那須野教会

１２月役員会（第２例会）

日時：１１月２０日（木）午後６時～
場所：日本基督教団　西那須野教会

巻　頭　言

田村　修也

西那須野の落とされた爆弾

幼少の頃、西那須野に爆弾が落とされて、豚が腰を抜かしたという話を親から聞かされていた。西那須野は開拓時代から養蚕の産地で、西那須野教会の創設者の方々は群馬県の養蚕の産地である島村からの入植者であったので、この地の生糸は島村に搬入されて、横浜港から海外に輸出されていた。栃木県の養蚕試験場・研修所が敗戦まであった。現在の拓陽高校の場所である。

そのため、製糸工場が多く稼働されていて、その中でも一番大きく、最後まで稼働していたのは大和組（現在のスーパーマーケットトライアルの場所）で、女工が１５０名程寮に入って働いていた。教会関係者が顧問となり、運営にも携さわっていたので、教会とは深い関係があった。巨大な煙突が２本そびえていた。工場が閉鎖された後も、オーナーが西那須野町長でもあったことから、教会の伝道集会には会場になっていた。賀川豊彦先生の伝道集会もここで行われた。戦時中は、全国各地がそうであっように、軍需工場となって「化工」と呼ばれて防毒マスク等を製造していた。

近隣の市町村には、那須野（埼玉）飛行場や金丸原飛行場があったので、艦載機の襲撃を受けたが、殆ど何もない西那須野に爆弾が落とされたのは何が標的になったのか不明である。一つは誇大な煙突を持つ「化工」工場か、西那須野駅には１００名程の兵隊が駐屯していた駅なのか、大山元帥の墓地や乃木将軍の農場兼別宅があったためか、那須御用邸の誤認か等々言われている。

この度、北那須郷土史研究会発行の「那須の太平洋戦争」という本の中に、この爆撃のことが書かれてあったので紹介したい。タイトルは「西那須野駅近くの爆弾落下」である。

〇爆弾落下のようす

大平洋戦争が始まって４ケ月余の昭和１７年（１９４２）４月１８日の午後１２時半頃、１機のアメリカ軍爆撃機Ｂ―２５が西那須野駅上空を通過し、西那須野駅南東（南町）『※元渡辺美智雄代議士事務所の近く一田村付記』に１個の爆弾を落とした。これは、本土初空襲の余波を受けたもので、栃木県最初の米軍による爆弾投下であった。この爆弾落下について、飯田勝丈氏執筆の「初空襲物語」（昭和６１年４月、「宇都宮よみうり」）には、次のように記されている。

「当日は土曜日で、近くの小学生が下校しつつあった。南方から爆音がはうように近づいてきて、みるみる頭上にかぶさってきた。当時の子供たちの目には、薄黒てバカでかく怪鳥のように見えた。低空なので、機体の中のパイロットの頭も見えた。すると、胴体の下の扉が「スーッ」と開いたと見るや、黒い物が落ちてきた。珍しい物見たさに小学生たちが、落ちる方向目指していっせいに駆け出した。その途端、「ズズーン」、空気を揺るがす大音響とともに、前方に黒煙が空中高く舞い上がった。」Ｂ―２５が近づく前に何らかの知らせがあったようで、狩野村第二国民学校（三島小学校）の先生と高等科の生徒２～３人が校舎の屋根に上ってみていたという。

そして、自宅の屋根の上からみていた人の話によれば、火花が三方に散り、黒い土煙が上がったと言う。この爆弾落下による被害状況は、次の通りであった。

・畑に直径６～７ｍ、深さ３ｍほどのスリバチ状の大きな穴があいた。
・近くの農家の羽目板が抜け落ち、家の中は土だらけで、屋根の上には吹き飛んだ竹の根っこがのっていた。
・１００ｍくらい離れた農家の障子が１０枚ほどバラバラになって使えなくなった。
・破片は１５０ｍくらい離れたところにも飛んだ。
・ブタが腰を抜かし、ニワトリはとさかだけを残して土に埋まった。そしてこのニワトリはこれ以降卵を産まなくなった。（次ページに続く）

９月例会（エルム福祉会に働きに学ぶ）於：蜂須カフェ　2025.9.20

（巻頭言の続き）この爆弾落下は、勝戦に酔っていた人々に衝撃を与えた。またもの珍しく、連日見物者でにぎわった。近隣郊外はもちろんのこと、宇都宮や遠くは福島県や岩手県から訪れた人もいたほどであった。人並が絶えなかったため、近くの人は「沿道で商売でもはじめようか」と話し合ったという。
　この年の４月１日、Ｂ―２５爆撃機１６機を積んだ米海軍ホーネットがサンフランシスコ港を出発した。真珠湾の恨みを晴らすべく、東京に奇襲をかけようというドーリットル爆撃隊で、ハワイを経由して日本近海に近づいた。そして夜間襲来を予定していたが、途中で日本海軍の監視艇に発見された。そこで予定を早めて１６機が出撃し、日本本土空襲の後、中国およびソ連のウラジオストック（１機）に向かった。なおこの空襲で、国内に約５０人の死者と、約１５０戸の全焼全壊があった。(飯田勝丈「初空襲物語」、小西一明、松本新清氏の御教示)

９月例会（エルム福祉会の働きに学ぶ）報告

「エルム福祉会の働きを学ぶ」をテーマに、大田原市を中心に多岐にわたる福祉事業（主に障害者福祉）を展開している「エルム福祉会」の働きについて、例会会場としたエルム福祉会が行っている「hikari no café 蜂須小珈琲店」にてランチを頂き、そのあと常務理事の川上聖子さんより施設の案内とエルム福祉会についてのお話を伺いました。
　例会会場の「hikari no café 蜂須小珈琲店」は、平成２４年度をもって廃校となった大田原市立蜂須小学校の校舎を利用したカフェで、私たちが集合した時も１０名近い来店者がオープンを待っており、その後も多くの来店者がある人気のカフェでした。
　建物は昭和７年に建てられた木造平屋であり、ランチはそのレトロな雰囲気に合わせて「サラダの器はビーカー」だったり、昔懐かしい「アルマイト製のトレイ」だったりと、来店者がタイムスリップしたような雰囲気を味わえるとても素敵で、まさに〝インスタ映え〟し、とても〝エモい〟カフェでした。もちろん料理はとても美味しく、そしてお腹いっぱいになり、何度も訪れたいと思わせるものでした。
　美味しく頂いた後は、川上さんの案内で旧校舎を見学しました。「食事を頂いたフロアは職員室だった」とか「貸しギャラリーは教室だった」とか、その後渡り廊下の先にある音楽室棟に移動して、エルム福祉会についてお話を伺いました。障害者支援を目的に昭和５９年に財団法人エルム会を設立し福祉作業所を開設したこと、より深く広く障害者福祉を行うために平成９年に社会福祉法人エルム福祉会を設立したこと、利用者の自立を目指して共同生活を行う「待降寮（グループホーム）」を幾つも開所したこと、利用者の自立を目指して就業機会を増やすために「hikari no café（カフェ）」を開店（現在は４ヶ所）していること、などなど障害を持った方々に寄り添った働きをお聞きしました。そして「先ほどのカフェにて注文や給仕を行っていたフロアスタッフの多くは障害を持った方」とお聞きし、そのしっかりとした働きぶりに驚き、エルム福祉会の支援の成果に感激しました。
　エルム福祉会と那須ワイズ及び那須ＹＭＣＡの関係ですが、エルム福祉会創設者の楡井一俊氏が那須ワイズのチャターメンバーであったり、那須ＹＭＣＡ設立時にはその準備のための会合をエルムの作業所（現在の「hikari no café 本店」）の部屋にお借りしたり、そして現在ではワイズメンバー数名がエルム福祉会の理事や評議員の任に就いているなど、約３０年にわたります。
〝地域社会のための活動〟はエルム福祉会も那須ワイズも共通の想いですので、これからもエルム福祉会の働きを、ささやかながらも支えたいと願います。

第２例会（役員会）報告

日時：１０月１９日（日）午後３時～
１１月７日（金）午後４時３０分～
場所：収穫感謝祭会場、田村副会長宅、
出席者：田村、村田、武田各メン、田村、村田メネット
１．１１月例会について
　１１月２０日（木）に行う。場所は、日本基督教団西那須野教会。リーダーとの懇談会。時間は、午後７時からとし、８時５０分日は終了する。司会は、武田将吾担当主事に依頼。食事は、西那須野教会の高久姉と古川姉に依頼する。食事の内容は、カレー、サラダ、デザート。お米、ジャガイモ、玉ねぎは村田。デザートの柿は、田村。会費は１，０００円。ゲストに、潘牧師ご夫妻、中村さん、飯沼兄、木村兄。出席者の確認は、村田が行う。できるだけ、後片付けが簡単になるようにする。
２．１２月例会について
　１２月２０日（土）に日本基督教団西那須野教会にて、パイプオルガンによる讃美礼拝、祝会を行う。お話は、潘牧師、奏楽は、木村真喜子姉に依頼。養徳園の案内は、田村副会長に依頼。食事の準備は、田村有希子姉に依頼。ゲストに養徳園の人たち、ユースリーダー、中村さん、ギデオン協会、西那須野教会員他歓迎する。養徳園へのプレゼントは、ミカン２箱。プログラムは、リーダーによるゲームを依頼する。

３．１月例会について
１月１７日（土）、午前１１時３０分～、龍鳳園で行う。場所の予約は、田村姉に依頼。招待者としては、潘牧師ご夫妻、中村さん、リーダー、その他お世話になっている方々。
４．ユースリーダーへの支援金について
スキーキャンプに向けてのリートレに関して、２０，０００円の依頼があり、承認する。
５．原田明子会員の広義会員としての申請について
本部に対して申請を行う。
６．１２月第２例会の開催について
１１月２０日（土）の例会前午後６時より行う。
７．２月例会について
リーダーの報告会とし、卒業リーダーへの記念品贈呈を行う。日程は、リーダーの都合に合わせる。

開拓と信仰の姿「開拓と西那須野教会」（１２）

副会長　田村　修也

大正１０年、弥三郎６７歳で、澱粉製造組合を解散して、新たに西那須野製粉株式会社を設立いたしまして、その社長に就任して、地場産小麦の製粉事業を始めました。澱粉工場といい、コンニャク製造、製粉工場といい、弥三郎は開拓地の生産物の生産増強だけに留まらず、絶えず収益向上を目指して、商品化に取り組んでいたことがわかります。今で言う１．５次産業化を目指していたと言えます。

昭和３年、７７歳で、家督を長男の董に譲って隠居いたします。それ以来もっぱら信仰生活に励むと共に、近隣や旧友を訪問して安否を訪ねると共に、キリストの証しにつとめております。

昭和１２年２月２４日、永眠いたしました。８３歳の生涯でした。臨終の時が近づいたので、家族・親族が床の周りを囲んで集まりました。息を引取った時に、誰からともなく、弥三郎の愛唱歌であった讃美歌５２７「わが喜びわが望み、わが命の主よ、昼讃え夜歌いてなお足らぬ思う。ならびもなき愛の主の、み声ぞうれしき、わが望みわが命は、永久に主にあれや。」が一斉に歌い出され、臨終の家を満たしたと伝えられております。まさに天国への凱旋でした。

西沢道夫さんからお聞きした話ですが、弥三郎さんの愛唱歌がもう一つあって、讃美歌５１３「①天に宝積める者は　いかに幸なるかな、主に任せしその喜び　いかにしてかは述べん。②救い主の功により　うれしき身となりぬ　悩み多き世もさながらみ国の心地して③主はわが歌わが喜び　ただ一つの救い　いさや伝えん世にあまねく　この良きおとずれを。」だったそうであります。この愛唱歌はまさに信仰者田嶋弥三郎の行き方を、そのまま現していると私には確信出来るのであります。

那須田嶋家４代当主篤次さんの弟の正人さんは長年名古屋中央教会の牧師をなさった方ですが、正人夫人の義子さんの手記に弥三郎御祖父さんと初めてお会いした時のことと、告別のことが書かれてあります。御紹介しますと、「はじめて未知の西那須野のお宅にお伺いした折は、御祖父様（弥三郎様）は御健在で、豊に下がる白いお髭の威厳あるお姿で、奥座敷でお目にかかりました。時、正に、つつじ、さつきが庭いっぱいに爛漫に咲き誇る、晴れた五月の日で御座いました。田嶋家皆様の暖かい御配慮の中にあって、主人と私はまことに幸せ一杯で人生のスタートを切ることが出来ました。

しかし、おだやかで又威厳溢れるお祖父様も、御目もじした次の年の冬、寒い２月夜半、天に召されました。旧約聖書、新約聖書を通して、６０回も毎日６章づつお読みになったという旧い聖書を胸に抱き、眠れる如く安らかなお顔は、正にキリストの御生涯の終わりを告げるに似た、荘厳そのものの告別式でした。」ということです。

弥三郎さんは海外での生活経験や欧米文化との出会いの経験から、子供たちを海外経験を積極的に勧めております。次男の真澄さん、次女のさきさん、三男の堅固さん、四女の優さんです。

（以下次号へ）

西那須野幼稚園だより

学校法人　西那須野学園
認定こども園　西那須野幼稚園
園長・理事長　福本　光夫

「あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。」
（聖書：コリントの信徒への手紙－１０章１３節）
「生きるための逃げは有りです。
有り有りです（校長先生）」
（『銀の匙 Silver Spoon』 vol.４）

７月４日（金）、英国推理作家協会が主催するミステリー・犯罪小説の国際的文学賞「ダガー賞（翻訳部門）」を、日本人として初めて王谷晶（おうたに あきら）さんが受賞されました。受賞作は『ババヤガの夜』です。

この快挙を、私は年長組サマーキャンプで、水遊園から園に戻る車中、ラジオのニュースで知りました。

王谷晶はペンネームです。私が若い頃にお父様に大変助けられた関係で、ご家族と一緒に彼女と数回会いました。ただ、会ったのは、彼女が小学生のときです。テレビに映る約３２年ぶりの彼女の姿には、当時の面影は、ほとんど残っていませんでした。

その後は長らくご無沙汰していましたが、彼女が作家としての道を歩んでいたことは、お母様のFacebook で知っていました。当時の彼女は不登校気味でした。小学校高学年とは思えないほど大人びた印象が今も心に残っています。

ＮＨＫによると、「王谷さんは１９８１年生まれの就職氷河期世代。高校卒業後は、非正規の仕事を転々とし、警備員やコールセンター、倉庫の検品や交通量調査など様々な業種を経験しました」。

様々な非正規職を渡り歩いてこられたので、生きるための大変な生活の日々の連続であったと思います。

だからこそ、彼女の次の言葉には、誰もが共感できる深い重みがあります。

「この世は地獄だなあと思うことが、誰しも何度かあると思うんですけれども、この、逆境にあったり、辛いことがあっても、その、逃げてもいいので、生きることを諦めないというものを書きたかった(ＮＨＫ ラジオニュース 2025.7.4)」。この言葉に、私自身だけでなく、多くの方が勇気をもらったのではないでしょうか。

この力強いメッセージと響き合うように、冒頭に聖書の一節を掲げました。神は、私たちが耐えられないような試練に遭わせることはなく、「逃れる道」をも備えてくださる方です。「逃げること」は恥ではなく、生き抜くための尊い選択であり、「生き続ける」ための希望なのです。

いま私たちが直面しているＶＵＣＡの時代－先の見通せない、不確実で、複雑かつ曖昧なこの時代を生き抜くために必要な「非認知スキル」のベースとして、子ども達には、遊びだけでなく、時には困難を他者とともに乗り越える経験も大切だと考えます。

親元を離れて、友達と教師だけで一晩過ごすサマーキャンプは、まさにそのような機会だったのではないでしょうか。

障害者福祉の基本的な考えと方向③　楡井一俊

福田恒存氏は、政治と文学の役割について論じた文章の中で、これを引用し、政治が、九十九匹を大切にする時、文学は、この迷い出た一匹を大切にするのだと言っています。しかし、わたしは政治においても、この一匹を大切にする政治が、本当の政治だと思うのです。教育についても同じことが言えます教室の片隅で、目立たない生徒や足手まといの生徒が軽んじられる傾向がありますが、民度の低い地域の政治や教育が、こうした傾向を反省もせずに持ち続けるところに、文化など育つはずがありません。

かつて、フランスのパリに一週間滞在し、その教育事情を視察しましたが、郊外の新興地サン・ドニの小学校と中学校を訪問した際に、そのどちらの学校にも知的障害のある児童生徒のクラスがありました。学年末夏休みが近いので、学校行事の学芸会の練習が行われて居りましたが、その児童や生徒達が、普通のクラスの生徒達に混って屈託なくそれに参加し、学校全体の教育の中で、本当に生かされているなと感じることができました。個人を大切にするフランスの教育が、見事に花開いている感じでした。

Cultivate という言葉が、ぴったりと当てはまる実践がありました。イタールやセガン・ビネー、シモンなど、知的障害児の教育の先達が築いてきた成果を大切に発展させている。そして、その底流には、「一匹の羊」を大切にするキリスト教精神に裏打ちされた、個人の尊厳を重視する思想が、脈々と波打っていると思わされました。

ひとりの人にはひとりの人生がある。その人の人生は、かけがいのないその人が主人公です。こんな簡単なことが、尊重されないでないがしろにされるところに文化の貧しさがあります。わたしは、今までに知的障害のある何人かの人と出逢いました。また、身体に障害のある人達とも出逢いました。そのひとりひとりが、かけがえのない人生を歩んでいるのです。その人の障害が重ければ重いほど、その人が、イエス・キリストの仮の姿ではないかと思わされるのです。障害のある人をどう処遇するか、神は私達の本心を試しておられるのかも知れません。

日本における気鋭の教育学者伊藤隆二先生が、かつてドイツのベーテルを訪れた時、重度の、意識もあまりない障害者をハンモックに乗せ、ひとりの修道女が終日揺すっているのを見て、「なぜそのようなことをしているのですか」と尋ねると、その修道女が「こうして動かしてやることで、唯一、この人の生きていることを証しているのです。」と答えたといいます。

『手には仕事を、心には神を』がベーテルのモットーです。第二次世界大戦中、ヒットラーは、戦争には何の役にも立たない障害者は抹殺しようと、このベーテルに軍隊をさし向けた時、ベーテルのあるビューレフェルトの街の人達は、軍隊の前に立ちはだかり、「この人達には何の罪もない。もし、この人達を殺すなら、私達を先に殺して！」と叫んで、結局、ヒットラーの軍隊は何もできずに引き上げて

行きました。「この弱い一匹の羊の滅びることは、神の御心ではない」という、イエスのことばが、如実に生きているのであります。

この子らを世の光に

日本の障害者福祉に大きく道を拓いた先覚者の一人に、糸賀一雄先生が居ります。彼は、戦後、滋賀県に近江学園を設立し、田村一二先生、池田太郎先生達と共に、滋賀県を福祉の先達県とすることに力を注いだのですが、今まで、陰に隠れるようにしていた障害者に光を当てようという、それまでの福祉の考えとは逆に、『この子らを世の光にしよう』と提唱されたのです。（楡井一俊著　以下次号へ）

ＹＭＣＡだより

【第３７回東日本ユースボランティアリーダーズフォーラムに参加しました！】

９月５日から９月７日にかけて行われた第３７回東日本ユースボランティアリーダーズフォーラムに、とちぎＹＭＣＡから４名が参加しました。東日本のリーダーたちと今回のメインテーマである「環境問題」について真剣に向き合い、「今自分たちには何ができるのか」を話し合いました。その中で、リーダーたちからは環境問題は子どもたちと一緒に考えるのも良い取り組みになるのではないかという意見も出ました。この２泊３日で感じたこと、考えたことを「とちぎＹＭＣＡ」に還元し、活動の幅を広げていきます。

【とちぎＹＭＣＡ・那須ＹＭＣＡの１０月の予定】

・１０/４（土）とちぎＹ野外クラブ（小学生）１０月活動〈稲刈り体験〉
・１０/４（土）北東部フォーラム
・１０/１１（土）－１３（祝月）第５６回全国ＹＭＣＡリーダー研修会（@阿南国際海洋センター（徳島））
・１０/１８（土）－１９（日）アジア学院第５３回収穫感謝の日

ユースリーダーのつぶやき

①本名（リーダー名）②学校名 学部なども
③出身地④ＹＭＣＡに入ったきっかけ⑤思い出に残った活動とその理由は？⑥今後の進路は？
⑦ＹＭＣＡに一言

①宇梶ひかり（うに）
②国際医療福祉大学 保健医療学部 作業療法学科
③栃木県宇都宮市
④友達がＹＭＣＡに入っていて誘われたからです。
⑤餅つき
初めての活動で緊張していたが、メンバーのみんなが話しかけてくれて嬉しかったからです。
⑥患者さんが元の生活を少しでも取り戻せるようサポートできる作業療法士になりたいです。
⑦一人前のリーダーになれるよう頑張ります。